

【10】 コーサンビー仏教小史――まとめにかえて

[0] 以上の考察の結果を、コーサンビーの仏教小史としてまとめてみよう。コーサンビーに仏教が伝わるまでは、【論文 16】に書いたことのまとめという意味にもなる。

[1] 釈尊は古代中国の暦で2月15日にブツダガヤーの菩提樹下で成道された。入胎から起算する年齢の数え方の満35歳と10ヶ月の日である。そして4月15日に満36歳とられた。そしてそのころから始まるその年の雨期はウルヴェーラーで禅定の楽しみを楽しんで過ごされ、その間に自分の悟った法を説くことを決心されて、雨期明けにベナレス近郊のイシパタナ・鹿野苑に向けて出発された。1ヶ月ほどして到着された釈尊はそこで5人の共に修業した仲間を教化されるとともにヤサなどを弟子とされ、そこで満37歳の誕生日を迎えられて、成道後2回目の雨期を過ごされた。そして雨期が明けると弟子たちを諸国に教化に出され、自身はウルヴェーラーに帰られた。ウルヴェーラーにおいて力を持っていたウルヴェーラカッサパなど三迦葉を折伏するためである。

こうして再びウルヴェーラーに帰られた釈尊は三迦葉とその弟子1,000人を教化する間に第3回目の雨期を過ごされた。一方諸国に布教に出た弟子たちは釈尊の弟子になりたいという希望者が現れるたびに、ウルヴェーラーにおられる釈尊の元に帰っていたのであるが、このようなことを繰り返しているうちに疲れ果てた。釈尊は釈尊でそのためにウルヴェーラーを離れるわけにもいかず、行動の自由を奪われていたので、そこで釈尊は弟子たちが出先で三帰依を誓わせることによって自分たちが自分の弟子を取ることを許された。それまではすべて釈尊が「善来比丘具足戒」で自分の弟子とされていたのであるが、この「三帰具足戒」を許されたことによって、弟子たちのサンガの原形が形成されることになったわけである。これはウルヴェーラーに帰ってから7度の雨期を経過したころであって、釈尊成道10年、釈尊は44歳になられてい。

こうして釈尊はウルヴェーラないしはガヤー近辺において、いつ諸国から帰ってくるかもしれない弟子を待っている必要はなくなって、王舎城に移りビンビサーラ王や舎利弗・目連と250人の仲間たちを教化した。それはその年か明くる年、すなわち釈尊成道10年目か11年目のことであって、このなかにピンドーラ・バーラドヴァージャが含まれていたのである。こうして経典によく出てくる釈尊を取り巻く1,250人の「仏を上首とする比丘サンガ」が形成されたわけである。

一方釈尊は仏弟子たちに自分の新しい弟子たちを取ることを委ねため、諸国において弟子集団が生まれ、釈尊教団は急膨張することになったが、その時点では弟子とすべき者の資格審査基準や、弟子の養成システムなどが整備されていなかったために、出家させるにふさわしくない者を出家させたり、出家した者の中には出家者にあるまじき振る舞いをする者が現れたりした。そこで釈尊は和尚と弟子の制と、新規に出家具足戒を受けた者は10年間は師匠とともに生活しなければならないという制度を作られた。したがって先に舎利弗・目連とともに釈尊の弟子になったピンドーラは、釈尊成道22年目くらいまでは釈尊とともに生活していたはずである。

このようにしてサンガ運営のための基礎的な準備が整ったので、三帰具足戒が廃止されて、

白四羯磨具足戒が制定されることになった。この時正式なサンガが形成されたのであって、これは王舎城で第 10、11、12 回目の雨期を過ぎられた後のことで、釈尊は 47 歳になられていた。

このように釈尊は、成道後の 12 年余は王舎城を中心に活動されていたのであって、仏弟子たちは諸国に布教に出ていたけれども、新規の出家希望者が出るとそのつど釈尊の元に帰っていたのであるから、諸国に仏教が根を下ろすということはなかった。おそらく諸国に布教に出た弟子たちが、その地に根を下ろして布教活動を開始するようになったのは、三帰具足戒が許され、さらに白四羯磨具足戒法が制定されて、正式なサンガが成立したおそらく成道 12、3 年目のことであつたであろう。

したがってこのころまでは、舎衛城においてさえも仏教は行われておらず、たまたま王舎城に商用に来ていた給孤独長者が仏が世間に現れたことを知ることになり、初めて釈尊を舎衛城に招待することになったことが契機となった。釈尊はこの招待を舎衛城に精舎を建てることを条件にそれを受けられ、こうして釈尊は初めて舎衛城を訪問されることになるが、それは成道 14 年目のことである。とはいうものの、その頃のコーサラ王波斯匿はいまだ仏教に理解をもっていたわけではなかったから、これを機に一気に仏教がコーサラ国に定着したというわけではなかった。

[2] したがってこのころはまだコーサンビーにも仏教は伝わっていなかった。しかしやがてコーサンビーの長者たちが、コーサラ随一の長者であつた給孤独が新しい宗教に熱心であるといううわさを聞いて、おそらく商用のついでにでも釈尊の説法を聞くところとなった。心服した 3 人の長者たちはコーサンビーに精舎を作るからと釈尊を雨安居に招待し、ここに初めて釈尊はコーサンビーに足を踏み入れられることになった。おそらく舎衛城に仏教が伝わってから 9 年ほどが経過した、仏成道 23 年くらいのことで、釈尊 57 歳のころであつた。

そしてこれによってコーサンビーの王室にも仏教信者が生まれることになった。それがウデーナ王の王妃であつたサーマーヴァティーとヴァースラダッターであり、サーマーヴァティーの侍女であつたクジュッターラーであつた。その時後にバツガ国の王子となるボーディは母親であるヴァースラダッターのお腹の中にいた。もちろんウデーナ王も仏教に触れる機会があつたが、未だ仏教に理解をもつに至らなかつた。

この時にはピンドーラは 10 年の共住弟子時代を終わって、一人前の比丘になっていたが、「仏を上首とする比丘サンガ」の一員としてコーサンビーにやって来た。そしてある日ウデーナ王に会うことになるが、むしろウデーナ王から迫害を受けた。

また釈尊から秘書室長的な役割を与えられていた阿難は、釈尊が意識的に自分の代理をさせたということもあつて、コーサンビーの人々から絶大なる信頼を得ることになった。

[3] 王がこのような姿勢であつたにも拘わらず、コーサンビーでは商人階級を中心に、王室の一部を取り込んで、仏教は着実に浸透していった。こうしたときに釈尊は再びこの地方に遊行されることになった。最初の訪問から 3 年くらい後の釈尊 60 歳のころのことである。

その中にかつて釈尊の侍者を勤めたことのあるサーガタが含まれており、サーガタはコー

サンビーを首都とするヴァンサ国の隣国であったチューティ国ないしはバンガ国において毒龍を退治することになった。ここはサーガタの母親の出身地であったということもあって彼はここにおいて外道の折伏に力を発揮したのかも知れない。

そしてこのころには頑なであったウデーナ王の心も仏教に傾き始めていた。あるいはそのままコーサンビーに残ったピンドーラの教化の努力があったのかもしれない。こうしてこの時には、釈尊の一行はウデーナ王にも歓迎されることになったが、王はついに釈尊と親交を結ぶには至らなかった。

[4] このようにして仏教はコーサンビーにおいて徐々に発展し、仏成道 35 年、釈尊が 70 歳になられたころには、隆盛期を迎えることになった。釈尊と共に育ち、釈尊が出家するときには従者として共に城を出たチャンナは、このころコーサンビーでは力を持つようになっていて、大きな精舎を建てたり、忠告に耳を貸さないなどの横柄な態度をとるようになっていた。

その時たまたま釈尊は 3 回目のコーサンビーの訪問をされていたが、チャンナの扇動に乗ったのであろうか、コーサンビーのサンガに紛争が持ち上がった。ほんの些細な律の規定をめぐる争いであったが、仏教の教えの本質からははずれて、形式的に処理をしようとする既成化が各地のサンガに起こっていたのである。そしてコーサンビーには増上慢のチャンナがいたせいであろう、釈尊の仲裁があったにも拘わらず、「これは私たちのことですから、釈尊は嘴を入れしないで下さい」という調子で、ついに破僧がなされるに至った。

釈尊は愛想を尽かされて舎衛城に帰ってしまわれたので、コーサンビーの在家信者たちは怒って比丘たちに日々の供養をしなくなった。糧道を断たれてしまった比丘たちは困って、釈尊の後を追いかけて、舎衛城に至って和解した。

[5] 釈尊の最後のコーサンビー訪問は初めての訪問から 20 年くらいたった後の、成道 42 年、釈尊が 77 歳になられたころであった。この訪問の主な目的は、バツガ国の王子であるボーディ王子の招待によるものであったかも知れない。そしてこの時にもコーサンビーを訪問されたであろうが、あまり大きな事績は知られない。しかしコーサンビーにはいまだにチャンナが居座っていて、おそらく専横的な振るまいがなされていたのであろう。釈尊はそれが入滅の時まで気にかかっておられたのであろうか、入滅に際しての遺言のような形でチャンナを梵壇にかけて罰することを命じられた。

[6] 釈尊は入滅にあたって、自分のなき後は、「あなたたちのために私が説き、制した法と律が、あなたたちの師である」と遺言された。そこで釈尊入滅の年の雨期に王舎城に代表的な弟子 500 人が集まって、雨安居を住しながら、これからの仏教徒の指標とするべき「法」と「律」を確認する結集が行われた。その最後に議長を務めていた摩訶迦葉は、その遺言のなかに、「チャンナに梵壇をなせ」という事項が含まれていることを阿難から聞いて、阿難にコーサンビーに赴いて梵壇を行うことを命じた。阿難とチャンナとは師弟関係にあり、また阿難はコーサンビーの人々からの信望も厚く、チャンナにも対抗しえるということがあったからであろう。

あるいはこのような因縁があったから、釈尊入滅後のコーサンビーの仏教は阿難を中心として回っていったかもしれない。釈尊が登場されない、阿難が主人公の経がいくつも存するのは、これを反映しているとも解される。

[7] コーサンビーは東インドと西インドをつなぐ、そして北インドと南インドを結ぶ、東西・南北の交易路の中継地点にあり、当時のインドを代表する大都会であった。したがってこの地に仏教が根づくについても商人階級の功績が大きかった。

とはいうものの、仏教の中心地はガンジス河の中流域に広がるヒンドゥスタン平野にあり、コーサンビーは釈尊の活動地という面からは中心からややはずれるという位置にあった。だからここには、マガダやコーサラやヴァッジといった仏教中国の中心地に位置する仏教とはやや異なった雰囲気が醸成されていたかも知れない。提婆達多が勢力を持った王舎城は、釈尊がピンピサーラ王を味方につけて、提婆達多の悪巧みを破門のような形で決着をつけることができたが、コーサンビーでは王室がそれほど強い後押しをしないということもあって、コーサンビーの仏教は好ましからぬ方向に進みつつあったのかもしれない。それを象徴するのが破僧事件であり、チャンナの存在であった。

このような傾向は釈尊が入滅されようとするときまで続き、釈尊も心を痛められていたであろう。最後の最後に解決したように見えるが、それにはこの地で勢力を持っていた商人階級の支持がなければならなかった。コーサンビーの破僧事件が、住民のサンガへの不協力によって解決したという伝承がこれを象徴的に物語る。しかしながらこの破僧やチャンナの梵壇によって、コーサンビーには異端の町という不幸なイメージがつきまとうことになった。

コーサンビーに残されたアショーカ王の法勅は

「天愛（アショーカ王の別名）はコーサンビーにおける大官に指示する。……和合が命じられた。

……僧伽においては認められない。比丘あるいは比丘尼にして僧伽を破るものは、白衣を着せしめて、住処（精舎）でない所に、住せしめなければならない」（塚本啓祥『アショーカ王碑文』レグレス文庫 1976.1）

という破僧に関係するものであって、これに類するものはサーンチーにもサールナートにも存するが、コーサンビーにこれがあるのは、上記のような背景があったからではないかと推測される。

[8] このようにコーサンビーの仏教は独自の性格をもって発展した。その後も仏教が盛んであったことは、数多くの碑銘によって知られるし⁽¹⁾、大乘仏教が起こったときにはそれももたらされたであろう。しかし法顕や玄奘が訪れたときには、すでに荒廃が始まっており、そこでは小乗仏教が行われていたとされている。

(1) 『高僧法顕伝』（大正 51 p.864 上）；鹿野苑精舎より西北へ十三由旬行くと、俱橋彌という国があり、その精舎を瞿師羅園という。仏が昔住まれた処で、今は衆僧がいて、多くは小乗を学んでいる。

(2) 『大唐西域記』（大正 51 p.898 上）；橋賞彌国は周六千余里、国の大都城は周三十余里、土称は沃壤、地利豊植で、粳稻多く甘藷茂る。……、伽藍が十余所あるが雑

草が生え荒れはてている、僧徒が三百余人いて小乗教を学んでいる。天祠が五十余所あり外道がまことに多い。城内の故宮の中に大精舎がある。高さ六十余尺で刻檀仏像があり、上に石蓋が懸っている、毘陀衍那王が作ったものである。……。城内の東南の隅に故宅余址あり、是は具史羅長者の故宅である。……。城の東南の遠くない所に故伽藍があり、具史羅長者の旧精舎である。

そして今日では畑のなかにその遺跡しか存在しないが、その遺跡の大きさによってかつての隆盛が忍ばれる。

- (1) 塚本啓祥『インド仏教碑銘の研究』(1996.2 平楽寺書店) pp.631~633、静谷正雄『インド仏教碑銘目録』(1979.4 平楽寺書店) pp.42~43 参照 なお、このなかには「大衆部 (Mahāsaṅghika)」の存在に言及するものがある。(塚本 ; Kosam 6-7、静谷 ; no.532)

以上

【付記】本稿は、本澤が基礎的な資料を収集してこれをもとに粗原稿を作り、森がこれを再点検したうえで最終原稿として完成させたものである。